

毒麦

マタイ福音書 13章 24-30

(そのとき、) イエスは、別のたとえを持ち出して言われた。「天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。芽が出て、実ってみると、毒麦も現れた。僕たちが主人のところに来て言った。『だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか。』主人は、『敵の仕業だ』と言った。そこで、僕たちが、『では、行って抜き集めておきましょうか』と言うと、主人は言った。『いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、「まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい」と、刈り取る者に言いつけよう。』」

説教

イエスさまが「たとえ」で語るのは、ひらたくいってしまえば、一言で語れないからです。天の国とはこうこうこういうものである、といてしまうと「うそ」になるからイエスさまは「たとえ」で教えてください。

イエスのことばを時事問題にあてはめると嫌味になるというか、おうおうにして間違えるので控えているのですが、コロナ問題を毒麦のたとえにあてはめるとどうなるでしょう。

天の国は次のようにたとえられる。ある人が良い種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。マタイ 13 : 24-25

アメリカの大統領はコロナウイルスのことを武漢ウイルスだといい、中国がつくって蒔いたとっていました。東京の知事は「夜の街」関連がウイルスの元凶だと看板までつくってテレビで宣伝しています。でもコロナウイルスは中国がこっそり蒔いたウイルスではなく、歌舞伎町のホストがばらまいて

いるわけでもありません。

イエスは「たとえ」として毒麦は「敵が蒔いた」といっているのもあって、本当に敵がそこにいて悪事を働いたのだ、と語っているわけではないのです。毒麦は雑草なので生えるときにはどこにでも生えます。そんなことはむかしも今も誰だって知っています。イエスさまは麦が成長しているときに毒麦だけを抜くと麦まで抜いちゃうからと理屈をいって、いまはそのままにして、収穫の時により分けようと「たとえ」を語りました。

「敵」「毒」ということばをつかい敵⇔味方、毒麦⇔良い麦という対立構造で「天の国」を説明しています。対立構造は最後のさいごに神が解決するから、いまはそのままにしておこう、というのがイエスの説明です。

アメリカの大統領も東京の知事もイエスさまのように真理を知らないようなので、中国や夜の街を敵に仕立て上げたあとの始末がたいへんになってくるでしょう。イエスさまには始末をまかす「刈り取る者」がいますが、彼にも彼女にもおしまいが見えず始末をつけようにも「刈り取る者」はみあたりません。誰かに責任をおしつける権力者には神は滅びでむくいます。

ところで、先週とおなじように毒麦のたとえにも「種明かし」があります。

良い種を蒔く者は人の子、畑は世界、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らである。毒麦を蒔いた敵は悪魔、刈り入れは世の終わりのことで、刈り入れる者は天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそうなるのだ。マタイ 13:37-40

たとえの「種明かし」はイエスのことばではないと先週もいいましたが、これもマタイ福音書記者の付け足しです。当時の解釈のひとつだったと理解できます。わたしたちがこの解釈にひっぱられて短絡的にこたえを求めると間違えます。コロナ時事に関連しては礼拝を強行して集団感染が発生したり、コロナパーティーを開いて感染死したりしてしまいます。

こころを静かにしてイエスの天の国のたとえを聞きましょう。
